

地方説話考

—その二— 地方説話の中央指向について—

青 木 敦

はじめに

前篇(その一 国司系説話群と郡司系説話群)では、地方説話の性格と系列について一考したが、ここでは視野をめぐらして、地方説話の「中央指向」について考察してみたい。

「中央指向」という表現もまた適切でないかもしれぬが、言わんとするところは、それぞれの地方に生まれた説話が、どのようにしてその故郷を出て、どのようなルートを通って中央に至り、最終的に採録され、いわゆる説話文学として定着したのであるか、ということである。

もちろん、ここで問題になるのは、地方説話が最終的に採録編集された場所が、果して「中央」であったかどうかということであるが、前篇で引用した『宇治拾遺物語』の序文も、当時の貴族の避暑地であった宇治での、説話の採録の様を伝えているし、またたとえば、『今昔物語』に収録されている一千余の説話の舞台の地方別の割合を見ると、京都を中心とした畿内のものが圧倒的な比率を占めていることや、さらに、当時の政治・文化の中心地が名実ともに京畿以外にあり得なかった、ということなどを考慮に入れると、やはり、古来の説話は、京を中心とした畿内、つまり当時の「首都圏」で、最終的にかつ体系的に収録され、い

わゆる説話集として編纂されたものと見るのが妥当であろう。

ただ、さらに問題となるのは、説話が集録された方法であるが、前述のように、地方から、あるいは組織的あるいは偶発的に、何らかのルートを経て中央に上って来た地方説話は、いったいどのような契機で中央に集められたのであろうか、ということであろう。

つまり、地方説話が中央で採録されるに至ったそのきっかけは、地方説話の方から自然に動いて中央に上って来たのか、あるいは、中央から何らかの意図的な働きかけのもとに、地方説話を集録しようという動きがあったのだろうか、ということである。

言い換えるならば、中央で地方説話を集録したその方法が、最終的採録者の立場からすると、(A)受動的な採録タイプであった場合と、(B)能動的な採録タイプであった場合との、大別して二つのケースが考えられるのではないかとということである。もちろん、単純な形式的な分類では把握できない複雑多様な実態があったであろうが、とにかく、今これを類型的に大きく整理してみるのも無駄ではあるまい。まず、この問題に焦点を絞って暫く考えてみたい。

一、地方説話集録の類型

地方説話が最終的に畿内で採録されるに至るまで、それらの説話は、それぞれの故郷を出てどのように都にまで流れてきたのであろうか。つまり、説話が上京してくるまでの過程をいくつかのタイプに分け、それがどのように採録されたかを図式化してみよう。

A 受動的採録型 〰地方↓都〱

a 意図的報告型

b 恣意的搬入型 (待ち受け型・自然上京型)

B 能動的採録型 〰都…:…↓地方↓都〱

a 循環型 (巡遊型・遠征型)

b 往復型 (都落ち型)

いま一応このように分類して、その一つ一つを具体的に考えてみることにする。

A—a型

まずこのタイプの特徴は、地方説話が、ある意図のもとに特定のルートを通じて首都圏に運ばれてきた、と考えられるものである。そして、この型は、ある意味では地方説話が都で採録された最も古い形態であったのではなからうかと思われる。

前篇では、古代における地方説話の採録が地方政庁によっても行なわれたらしいことに触れたが、この現象は古代に溯れば溯るほど顕著だったはずである。なぜなら、古来、地方政庁の所在地は、必然的にその地方文化の中枢であり、また中央と地方との文化交流の重要な中継拠点でもあったからである。それゆえ、もし中央政府が各地方政庁を通じて地方説話の計画的な採録を企図したのであれば、地方に広く分布する説話

のタネは、まず古老や物識りたち、つまり当時の在地知識層の手を経て、漸次各地域ごとのブロック・センターに集められたであろうと想像される。その際、最も末端の文化センターは、まず各「里(郷)」の長たちの所であつたろう。ついで、それは直接の上級機関である郡司の郡衙に持ち寄られ、さらにいくつかの郡衙の資料は最上級の国衙に集められたであろうことは推察に難くない。

もちろん、これらの採集・収録の過程にさまざまな整理・取捨・脚色等が行なわれたであろうことが十分考えられるが、とにかく、こうして、かなりの量の地方説話が、郡司↓国司という最もオーソドックスな公的ルートを経て、組織的に中央にもたらされたことはまず間違いないと思われる。

たとえば、『風土記』に採録された地方説話の性格が、それを有弁に物語っている。『風土記』が、律令制を基盤にした中央政府が地方の実情把握を目的として蒐集した資料的性格を有していたらしいことは、すでに論じられているが、『続日本紀』の

畿内七道諸国。郡郷名著好字。其郡内所生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物具録色目。及土地沃瘠。山川原野名号所由。又古老相伝旧聞異事。載干史籍言上。

(和銅六年五月)

の記事の中の「古老相伝フル旧聞異事」とは、地方の古伝承の謂であり、これなどは、地方の代表的説話が中央に運ばれたルートとしては最も公的な意図のもとに行なわれた徴証と見られるケースであろう。

さらに前にも触れたが、踐祚大嘗祭の際における「語部」上京の風習

なども、その典型的な一例といえよう。

伴宿祿一人。佐伯宿祿一人。各引語部十五人。入自東西掖門。就位奏古詞。

(『延喜式』卷七)

この、地方の語部たちが奏上した「古詞」というものが、どういう性格・内容であったのか、非常に暗示的であるが、いずれにしても、それが地方説話の公的ルートを経ての上京であったことは疑いない。

これに関連して、たとえば古く出雲国の国造が、その代がわりごとに都に上京して「神賀詞」を奏上したという慣習などにしても、それが単なる「賀詞」とどまらぬ、出雲地方の固有の古詞の奏上が、当然随伴したと想像して大過はあるまい。そしてこういう慣習は、出雲一国のみならず、もともと諸国の国造の交替時に必ず行なわれた行事であったはずである。

このように考えてくると、このA—aのタイプは、最も古くから、地方説話の中央上京の公的ルートとして存在していたことが確認されるのである。

A—b型

次にこのタイプの特徴は、地方説話が//自然に//首都圏に流入し、そこで最終採取者によって採録されたという点である。

この//自然に//という意味は、説話の上京・搬入が、意図的でなく恣意的であったということである。

いうまでもなく、所謂「地方説話」がそれぞれの故郷から中央に運ばれたルートは、公的な官公吏の手を経た組織的なものばかりであったは

ずもない。もっと散発的にもっと偶発的に、中央に流れ、そこで採録された地方説話もまた多かつたに違いない。恣意的とはそういう意味である。

つまり、地方説話の携行者(運搬者)が、この話を都に持って行く、などという意図など全くなく上京し、たまたま何らかの機会に、自分たちの故郷の説話民譚を語り、これが採録して残されたいというケースである。前述した『宇治拾遺物語』の序なども、その叙述が果して事実であったかどうかは別にして、そこに誌された内容は、当時の説話の採録の事情の一端を伺うに足りるが、特に「往き來の者、上中下をいはず呼びあつめ、昔物語をせさせて……」というくだりなどは、かなりリアルに描かれていると考えてよからう。ここに描写された宇治大納言の様態は、まさに貴人の閑雅な避暑のすさびである。

往來の者を呼びとめては昔話を語らせ、自分は「内にそひふして、かたるにしたがひて、大きなる双紙にかかれけり。」というのだから、いかにも有閑文人の//寝て待て//式の鷹揚な採録方法で、「待ち受け型」の典型とも言えようか。

そして、これほどの様子ではなくても、とにかく、都の貴族・文人・僧侶などの地方説話に関心を有した中央智識階層が、採録の意図を持って地方出身者や上京者に働きかけて、地方の説話を精力的に蒐集したであろうことは十分想像できるのである。

さらに、この型を古来の伝承に帰納して考えてみよう。たとえば記紀に見られる「神武東征説話」であるが、もともとこの説話は、記紀における神代と人代との理念的接合と、神話と現実との政治的調整と、日向

と大和との地理的連絡と、さまざまな意味をもって解釈されているが、この説話の中に見られる東征の途次の経過地点におけるいくつかの地方説話的素材の扱い方は、明らかに中央指向の流れの中に繰り込まれた形になっている。

もちろん、この伝承が最終的に記紀の中にまとめられるに至るまでの経過は、そう簡単ではないはずであるが、しかし、いずれにしても、日向に始まり、筑紫―速吸門―豊国・宇佐―阿岐―吉備―浪速の渡―河内―和泉―紀―熊野―吉野―大和、という東征コースの経過地点の詳細な追跡と随所の地域伝承的記録は、この説話の生い立ちが、やはり無作為的な上京型であることを示している。

特にこの伝承の途中に「国造」が登場するのは暗示的である。筑紫の東征軍が「速吸門」つまり豊予海峡で亀の甲に乗った釣人に会い、これを海道案内人として東進したという話で、この釣人「国つ神・梶根津日子（椎根津彦）」は、古事記には「倭国造等の祖」と注があり、書紀には「以珍彦為倭国造」とある。そしてこの伝承の中の少なくともこの部分は、倭国造家に伝わっていた説話であったと考えてよいであろう。なお、地方説話と国造との関連は、さらに後節において考察したい。

このように考えてくると、この東征説話を始めとして、後世のいわゆる上京コースをとる説話の多くが、このA―b型に該当するように思われる。たとえば時代は下るが、紀貫之の『土佐日記』なども興味ある一例であろう。これは、貫之が土佐守の任期を終えて、都に帰る途次の十五日間の日記体の文学としてあまりにも有名であるが、この中には、

いわゆる地方説話的素材の採録らしい痕跡はほとんど見当たらないといってもよい。しかしこの『土佐日記』が、まぎれもなく、地方から都を志向しての「旅の文学」の上京型であることと、さらにそれが、有名な「女性仮託」の形をとっていることは、かなり暗示的である。何が暗示的かということは今暫く措いて、先に同じような上京型の日記である『更級日記』を考えてみよう。

「あづまぢの道のはてよりも、なほおくつかたに生ひいでたる人」、つまり菅原孝標の娘が、家族とともに遠い上総国からはるばると都に上る途次の旅日記の部分は、作者の少女時代の夢と感傷を縋いませながら美しく描かれているが、これも、国守の任期満了に伴う上京帰任という点では、『土佐日記』と全く同じケースなのである。ただ『土佐日記』と違って『更級日記』には、東国から都に至る道中の経過地域での地方説話的素材が、かなり豊富に織り込まれていることに注意する必要がある。

とにかく、こういうさまざまな形をとりながら、地方説話が上京者の手によって採録され、都にもたらされたであろうことが、かなり明瞭に見てとれるのであるが、こういうケースは、古くからかなり多かったのではなかったかと思われるふしがある。

先に『土佐日記』が女性仮託の体裁で書かれているのが暗示的だと触れたのは、実はこういう国守帰任に伴う上京型の日記文学は、受領階層に属する女性たちによって書かれるのが、本来のたてまえであったのではなかったか、という疑問があるからである。これについては、次章において、説話携行者の問題と関連して考えてみたい。

B—a型

A群にくらべてB群、つまり能動的採録型の特徴は、説話の採集者が中央に定着・留滞しておらずに、能動的に地方に下った際に、地方説話を採録・携帯してきたらしいことである。つまりひとくちに言うなら、採録者が都から地方に下り、地方説話を持って再び都に戻って来たというケースがこれにあたる。

その中で、このB—a型の特徴は、物語の主人公が巡遊歴訪する各地方の土着説話が、その巡遊ルートに沿って採録され、都に回収されたらしい痕跡があることである。

古例をあげると、記紀に見られる「倭建命」の遠征譚と、その巡遊ルートに密着した各地方説話の採り入れ方は、このルートの一巡サイクルにかなり多彩なローカル・カラーを織り込んでいる。

たとえば、西征でクマソタケルとイズモタケルを討った話。さらに東征では、尾張のミヤズヒメとの物語、相模の国造から受けた火攻めの災、走水の海の難、オトタチバナヒメの入水説話、足柄の坂の神の話、東の国造を給わった火焼の老人との連ね歌、伊吹の山の神の物語、美濃から伊勢にかけての病状と地名発祥説話、と続く、この東海道・東山道から伊勢にかけての病状と地名発祥説話、と続く、この東海道・東山道の一大説話圏を巡っての地方説話が、雄大・華麗に循環し、最後に都に志向・回収される過程をまざまざと見て取ることができよう。

もちろん、これらの物語は、もともと採録されていた地方説話を集めて、「ヤマトタケル」という架空の英雄伝承に組み入れ、連続させた編纂方法であろうと考えられるが、それと同時に、このような地方説話の巡遊サイクルをめざした発想は、文学史上、これ以降かなり顕著に尾を

曳くのである。

B—b型

もう一つのタイプはこの「都落ち型」ともいべきもので、A群の上京型と対照的な型である。この型の特徴は、都から地方へ下る旅程の途中小および目的地で、説話的素材が採録されていることであるが、ただし、それがどのように都に持ち帰られたか、という上京復路が省略されているケースが多く、つまり「下り片道」に説話採録の焦点が絞られているあり方である。

この型はいわゆる「貴種流離譚」と密接な関連をもって考えられるが、たとえば『伊勢物語』の「東下り」の条や、『源氏物語』の「須磨」「明石」の話題等に代表されるケース。さらに『今昔物語』の「利仁将軍若キ時京ヨリ敦賀ニ五位ヲ将テ行キタル語(巻第二十六)」の例なども、都から敦賀まで下る旅の途次と、目的地の敦賀での情況などか、かなり克明に描かれている。特に、琵琶湖西岸での狐を素材にした動物説話の採録のあり方など注目すべきであろう。

さらに演繹すれば、『義経記』の義経主従の奥州下りの部分や、あるいは『十六夜日記』の性格なども、このタイプに該当するであろう。

こうして考えてみると、地方説話が最終的に都に集められ、そこで採録・編纂されたと言っても、それにいろいろ異なるルートと、さまざまな型があったことが推定できるのである。

そして、この「地方説話の上京ルート」の考察は、必然的にそのルートに関与した人々、つまり説話の採集者・携帯者たちの問題に進まざるを得ない。

二、地方説話の中央指向のルートとその担い手（携行者）たち

（孝徳紀）

前章では、地方説話がどのように採集運搬され、最終的に中央に上京してきたか、という問題について、幾つかのタイプを想定し分類してみたが、この章では、それと密接に関連して、前篇で扱った「国司系説話群」と「郡司系説話群」とが、どのように係わり合い位置づけられるか、を考えてみたい。

1 郡司系説話群の中央指向

大化以降の律令制の確立に伴ない、古き代の国造たちの多くが郡司に切り換えられたらしいことは前篇でも触れたが、これら土着世襲の地方官たちが、その地方文化勢力圏内に保持していた説話群が、いったいどのようにして中央にもたらされたのであろうか。

もちろん、彼らに関する一部の説話群は、彼らの上司である国司たちの手を経て中央にもたらされたであろうが、それも、国司階級の好みや許容に合格する範囲の種類の話であつたらしいことは、前篇で考察したところである。それ故、それ以外に、彼ら土着の地方官たちの保有していた説話群が、直接、何らかのルートを経て、意図的に中央に運ばれたらしい痕跡があるとするれば、それは「采女」たちの手を通じて以外に考えられない。

いうまでもなく「采女」とは、天皇に近侍していた後宮女官の一つで、古く地方の国造が、これを朝廷に貢献する習いになっていたが、令制以後は郡司がこの仕事を継承していたと伝えられる。しかもその采女たちは、

凡ソ采女ハ郡ノ少領ヨリ以上ノ姉妹及ビ子女ノ形容端正シキ者ヲ貢レ

とあるように、郡司階層の中でも比較的上流の子女が選ばれ、宮廷の女官として貢献されたものであつた。それ故、郡司階層が保持していた郡司系説話群の中の主要なものが、これら采女たちを通じて、というより采女たちと共に、中央に献られたと想像することは十分の根拠がある。

たとえば古事記の中で有名な「三重の采女」の物語について考えてみよう。雄略天皇が長谷の百枝槻の下で豊楽をした時、伊勢の国の「三重の采女」が大御盞を捧げんとして、槻の葉がその盃に落ちて浮いたのに気づかなかつた。これに激怒した天皇は、やにわにその采女を打ち伏せ、佩刀を抜いてその首に突きつけたが、采女が「吾が身をな殺したまひそ。白すべきことあり。」と申して歌を奉つたので、天皇はその歌に感じて采女を許してやった、という話である。

雄略天皇にまつわるさまざまな伝承の中で、この部分はかなり長い歌謡を伴って異色であるが、特に、采女・太后・天皇がそれぞれ歌を詠み、それを古事記は特に「この三歌は天語歌なり」と述べているところが興味深い。「伊勢の国の三重の采女」という、地方の地名を冠したこの采女は、まがうかたなく伊勢の国造が献つたその国魂を有した女性であるろう。そしてその「三重の采女」が歌つた歌謡というのが、実に古色を漂わせて暗示に満ちている。

まず「纏向の日代の宮は……」に始まるこの歌の冒頭句の「日代の宮」は、もともと景行天皇の皇居であつて、この物語の雄略天皇の皇居であつた「長谷の朝倉の宮」とは距離的に隔たっている。このこと自体、この歌がかなり伝説的な由来をもっていることの証左であるろうが、

さらにこの歌謡の中段に、

ま木さく 日の御門

新嘗屋に 生ひ立てる

百足る 槻が枝は

上つ枝は 天を負へり

中つ枝は 東を負へり

下つ枝は 鄙を負へり

の部分は、何を意味するのであろうか。天と東と鄙との三つの方角に象徴される世界観は、古代伝承の性格の一面を暗示していると言えよう。

そして、これら三首の歌謡がいずれも「ことの語りごともこをば」という終句で結ばれ、これが古事記上巻の「八千矛の神の歌」の一群に見られる「神語」、つまり一人称発想の託宣の文学の形と共通していることも、この采女の歌がかなり古い伝統をもっていることの証しであり、さらに采女たちと、その護持する地方文学との関係の原型を残しているとも言えよう。

こうして、采女たちによって中央に運ばれた地方土着の説話群は、ある意味では、地方の土地の国魂のこめられた呪的な伝承として中央に貢献されたものであろう。前述の神武天皇東征説話や倭健命の東征説話における国造関連説話のあり方も、この視角から捉えることができよう。それは出雲の国造の神賀詞とも、大嘗祭の語部たちが奏した古詞とも、密接に係わり合いながら、古来の土地土地の呪的なすだまの呪詞を、朝廷にもたらし続けたものに違いない。

言い換えるならば、采女とは、これら地方の古き国魂を中央に捧げる

人身御供として、その土地の古伝承をその身心に備えた「呪詞の権化」として、朝廷に貢献されたのであろう。それはもちろん、地方豪族への支配をより全きものにしよとする中央政府が、それら地方豪族たちの忠誠心の証しとしてさし出させた「人質」が采女であった、と考えることもできよう。しかし、もっと古く、もっと本質的には、これら采女たちと、その故郷の国魂と呪詞とは、まさに密接にからみ合っていたと考えるほかはないような気がする。つまり、古き「人質」とは、その国魂と呪詞をも含んで、呪的・信仰的次元からの服従・隷属の象徴にほかならなかったのであろう。

郡司系説話群とは、実にこのような古き呪的な伝統の息づきの中に伝えられた地方国魂の、文学的表現のブロックにほかならない。そしてそれはまた、中央政府の地方順化政策の観点からすれば、地方国魂説話の中央集中化にほかならなかったと言い得るのである。そしてこれを考えるに、これら郡司系説話群の中央指向ルートは、前節の地方説話の集録の型から見れば、まぎれもなく典型的なA型なのである。

2 国司系説話群の中央指向

前章で考察したように、国司系説話群の性格からすれば、その中央集中のルートは比較的明瞭である。そしてその集録の型はまぎれもなくB型に属し、郡司系説話群とは対照的な集録タイプを見せている。

その理由として考えられることは、律令制下の国司たちは、任期四年の周期で、たえず中央から地方に派遣され、再び中央に帰任するということである。これは、郡司たちが自分たちの土着の故郷の説話を、片道コースで中央に貢献する立場とは全く正反対で、中央から派遣され、地

方の説話を採録し再び中央に戻るといふ国司のあり方は、典型的な循環型つまりB型なのである。

そしてまた注目すべきは、これら国司系説話群を支えていた大きな力が、実は国司の娘たちのグループであったのではないか、という点である。いわゆる「受領層」に代表される中小貴族の娘たちが、中古平安時代の王朝文学の、主なる担い手であったことは、明白な事実であった。

史上その名の知られている文壇の才女たちは、平安時代の宮廷や上流貴族の後宮に仕えていた無数の無名の女房たちの中では、氷山の一角ともいべきごく少数の女性にすぎない。むしろその名も伝わらぬ大多数の女房たち、つまり受領層に代表される下層貴族の娘たちによってこそ、王朝女房文学の基底が支えられていたと言っても過言ではあるまい。あるいは平安朝女房文学の中の地方的素材は、実にこれら受領層の娘たちによって採り上げられた国司系説話群の一部であったのではなかったか。王朝女房文学を詳細に検討してみると、その中に、都を遠く離れた鄙話の話題が、思いがけない形で新鮮に散りばめられていることに気づくであろう。これら地方説話的素材が、どうして華麗なる中央女性文壇の中に、生き生きと織り込まれているのか、という謎は、こういう視角から解くほかはないような気がする。紀貫之が、あの上京文学「土佐日記」を、女性の手に成るべく仮託した謎も、実はこういう背景を考えなくてはならないのではあるまいか。

三、地方説話的視角から見た王朝女流文壇の性格

こうして考察の糸をたぐってくと、地方説話の多くは、最終的に中央後宮に集められた可能性がかなり強いと考えることができよう。これ

はかなり暗示的かつ象徴的な事実である。しかもその搬入ルートには二つの系統があった。一つは後宮女官として貢られた采女たちと共に、後宮に入ってきた「郡司系説話群」。もちろん、この搬入の型はA型である。もう一つは、国司の娘たち、つまり後宮に仕える中央の中小貴族の娘である女房たちによって持ち込まれた「国司系説話群」である。

いま、王朝後宮文壇だけに焦点を絞って考えるなら、王朝文壇に搬入された地方説話には、この二つの系統があったはずである。もつと図式化して考えるなら、郡司系説話群は采女を介して天子の側近に、国司系説話群は女房たちを介して后妃のサロンに、それぞれ搬入されたであろう。そしてこの二つの系統の地方説話は、究極的には、后妃の周辺とそのサロンに定着して、そこに地方国魂の呪的な祈りを安定させたはずであった。平安朝女流文学の隆盛の一因として、こういう二系統の地方説話の素材が、長い伝統とともに、後宮に絶えず運び込まれ、醸成され、根強く生き続けたことを無視することはできない。

しかしまた、地方説話はどうしてこのように王朝に流入したのであるうか。逆に言えば王朝後宮は何ゆえに、これら地方説話を蒐集する必要があったのであろうか。それは王朝後宮の根源的性格そのものが、必然的に地方説話と切り離せない宿命を有していたと考えるほかはない。

本来、全国の土地土地の強力な国魂の呪威を、中央朝廷に奉貢するという理念は、古来さまざまな形で行なわれてきた。記紀による后妃の記録の地方的色彩をはじめとして、前述の采女の献上、踐祚大嘗祭の際における由紀国・主基国の卜定、聖なる瑞穂の献上。そして各地の語部や舞人たちによる古詞・古謡の奏上。さらに地方国造の交替ごとの中央へ

の奉告と賀詞奏上、等々、その系列を辿れば、地方の呪霊の中央貢進のイメージは、かなり顕著に浮かび上がるであろう。

そして、これらと同様に、文学においても、地方の呪的な国魂を語り伝えた「古詞」が折りにふれて中央に奉告され続けてきたのであろう。

地方説話とは、実にこれら古き「古詞」や「旧聞異事」の末裔にほかならない。それは、地方の土地の呪霊をひそかに秘めやかに抱き続ける聖なる土着の処女たちによってまず伝えられ、中央に奉貢された。

采女とは、これら地方の国魂と古詞を帯して、朝廷に入った女性たちにはかならなかつた。そして、後世の後宮女房たちもまた、これらの伝統を継ぎつた女性群ではなかつたか。その意味で、王朝後宮と地方説話とは切っても切れない関係にあつたはずである。

もともと、後宮の後妃たちというものは、その出自の家柄と土地の呪霊を持って、天子の後宮に入るべきものであつた。その出自の家柄に伝わるさまざまな伝承と、その土地に伝わる多くの古詞を、その一身に具備して中央後宮に入ったのが后妃たちであつた。それゆえ、后妃たちは、その土地の呪的な予祝を体現しつつ、天子の寿齢に寄与するという聖なる役割を荷っていたはずである。

古事記の序に伝えられる「諸家ノ賈ル帝紀及ビ本辞」とは、各氏族各土地の聖なる女性によって伝承されたと考えるべきであろう。「語部」という職掌が女系であつたか否かということ論ずるゆとりは今ないが、それらの地方古詞の女性伝承者たちが、一旦后妃として後宮に入るや、それら各地の古詞・古伝承は、天子と国家の長命寿福を祈る賀詞ともなつたのであろう。

その意味で私は、「帝紀」に対する「后紀」というものの存在を考へることができると思う。もちろん、それら后紀的なものの本質は、今、帝紀と本辞の中に編入・埋没されてしまっているが、これらの中から、后妃に関する部分だけを抽出すれば、これは明らかに「后紀」なのであり、そこにこそ、古き地方説話の神髓が新鮮に生き続けていたはずである。地方説話の原型とは、それらの意味で、「后紀」をも含んだ古く広き地方呪霊の古伝承であつたはずである。

むすび

いわゆる「地方説話」について、「その一 国司系説話群と郡司系説話群」「その二 地方説話の中央指向について」の前後二篇にわたつて、そのあり方を考えてきたが、この大きな主題を考察するには、あまりにもかいなでの試論にすぎない。

古来、全国のあらゆる土地土地の、人のたつきと土壤と共に育まれて伝えられてきた豊かな地方説話の群は、それぞれ独特の地方的色彩と性向を具えつつ、尨大なる民話・説話の地方文学圏を構成してきた。そして、その大部分のものは、気の遠くなるような年月の流れの中で、訥々たる口誦伝承の受け継ぎのくり返しの過程過程で、あるいは忘れられ、あるいは変形し、あるいは消え去っていったのであろうか。今、われわれが文献記録の上で確認できる地方説話的素材は、それら無数の地方説話圏の中から、まさに僥倖にも蒐集された九牛の一毛でしかないものであろう。その歴史の波のうねりに堪えて生き残った、厳しくもはかなき地方説話の宿命のようなものが、わが文学史上、特異な一面を見せているのを見逃すことができないのである。